

平成21年度

まちづくり講演会
まちづくり講演会

講演録

2009年4月30日

◆ 岸 裕司(きし ゆうじ)

プロフィール

2009年2月現在



1952年東京生まれ。中央大学法学部通信教育課程中退。1980年東京湾の埋め立て地・千葉県習志野市秋津にまち誕生と同時に家族と転居。1986年から市立秋津小学校PTA会長を含む役員経験7年。以後学校区の生涯学習の充実に努め現在に至る。在日朝鮮人(韓国籍)の妻との間に一女二男。長女・長男は独立結婚、孫二人。

【現在】 広告デザイン会社の(株)パンゲア代表取締役／秋津コミュニティ顧問／学校と地域の融合教育研究会副会長／こども環境学会理事(平成19年度～)／財団法人社会教育協会理事(平成17年度～)／千葉県生涯学習審議会委員(平成15年度～)／千葉県社会教育委員会委員(平成20年度～)／埼玉大学教育学部非常勤講師(平成20年度～)／文部科学省「総合的な放課後対策推進のための調査研究会議」委員(平成20年度)ほか

演題

「小学校を拠点に

楽しく元気な生涯学習のまち育て」

講師

千葉県習志野市 秋津コミュニティ

顧問 岸 裕 司 氏

2009年4月30日 サザンクス筑後小ホール

こんにちは。今ご紹介いただきました岸裕司と申します。今日羽田空港をちょうど午後2時の便で来まして、みなさまにお会いできて大変うれしく思っています。僕の前に市政功労賞、福祉功労賞を受賞されたみなさん大変おめでとうございます。その後僕が講演させていただくということで、聞きましたら今回で(まちづくり講演会)7回目くらいだそうで、特にこういうテーマ(小学校を拠点した生涯学習のまち育て)は初めてだということで、大変うれしく思っています。

最初に、僕の個人的なことをお話させていただきますと、現在56歳なんですね。(会場から)「え～」という…いいんです、どこでもそうですから。だいたい頭は薄いし、20年くらい生やしている髭も。だいたい地域の方に、かれこれ十数年前、僕が40歳代の半ば頃にこう言われました。「岸さんは定年後何年くらいなの？」って。だから60定年ですから、もう45くらいのときから60過ぎに見られていた。子どもが幸いにも3人生まれることができて。生んだのは僕じゃなくて、ワイフなんです。3人とも成人しています。上の2人は結婚して、家を出て、長男には子どもが2人。今3人目がおなかにいるという大変めでたい。だから、僕はおじいさんなんです。長女(孫)が今年小学校に入ったんですが、なんとこの3月1日に長男家族、長男と嫁さんと子ども2人、おなかにもう1人、その家族が東京にいたんですけど、娘(孫)が秋津小学校に入りたいから秋津に戻りたいと言ってですね、Uターンしてきたんです。その娘が、この4月に秋津小学校に入りました。その娘(孫)が、7年前に生まれた時に、

この子は、話をするようになったら、僕のこと何て呼ぶんだろうと思ったんですね。多分、「じーさん」と呼ぶんだろうかと、何か抵抗があって、そうだ“裕くん”と呼んでもらおうと、ですからそれ以来、僕のこと岸裕司で“裕くん”なんです。先日久学式があって、ちょっと僕も顔を出したんですが、「あ、裕くんだ！裕くんだ！」って入学式の会場で言われて、大変うれしかったです。

何を言いたいかというのと、“やっぱりUターンしたい”または“あの街は安全で安心だから子育てするには、あそこに引っ越したい”Iターンですね、そういうまちに私たちはしていかないと。紹介にもありましたけれど、東京湾の埋め立て地に、何にもないところに29年前にできた、新しい街なんですね。ですから、これから先100年、200年、こちらの筑後のように、場合によっては、何千年続くかもしれない出発を我々がしたわけですから、続けるためには子どもたちがいなければならない。そういう場所として、どうも小学校、習志野市立秋津小学校というのが、まちの誕生と一緒にできたんですけれども、小学校を拠点としていいんじゃないだろうか、そんなことを考えながら、PTAの役員もやり、その後は生涯学習という言葉が最近言われてますけれども、生涯学習の推進団体それが秋津コミュニティという名称ですけれども、そういう団体をつくって、今日まで僕自身でいうとかれこれ22年関わり続けています。

ですから、子ども3人は、とっくに卒業したんですが、私自身は卒業しない、“小学校を卒業しない地域の変なおじちゃん”と

してさまざまな活動をしています。幸いこちらの筑後市も、小学校区を単位として、まちづくりを積極的に進めていきたいということでご指名いただきましたので、私自身大変心強く思っています。今日の僕の話で元気が出て、「よし、明日からやってみよう」と思ってくれる方が1人でも多く出ていただくと大変うれしく思います。

話す内容は、事務局でつくっていただいた資料に書いていただいています。間に僕の本のチラシとかがありますが、演題は先ほど、司会者の方が言っていた「小学校を拠点に楽しく元気な生涯学習のまち育て」その右側に～秋津小学校区の実践どこでもできる小学校、地域が持つ3つの機能を活かした生涯学習の推進～ということで、裏まで講演の骨子を書いておりますので、時々見ていただければというふうに思います。

最初にどんな活動をしているのか DVDで見ていただこうと思ったんですけど、さっき袖の方からみなさんのお顔をちょっと拝見したら、僕の予想よりも、平均年齢が高そうだ。だから悪いっていうんじゃないですよ。高そうだったんで、DVDは後にまわして、先に画像で、ちょっとお話を進めていきたいというふうに考えました。

それじゃあ、さっそくですが、秋津小学校の校庭には、いろんな果樹を歴代ずっと植えています。今の時期だとりんごの花が咲いて、何と、受粉する人は青森出身のイチノセオサクさんというおじさんがやります。普通はミツバチがやるようなんですが、うちでは人間が受粉する、でも、だいたい大きくなると落ちこちちゃうんですね。青果にまではなりません。だからどうだっ

ていうことではありません。

小学校というのは、どういうエリアかということ私活動しながら感じてきた、主にメリットの部分ですね、小学校区、秋津小学校区というのは人口7,500人くらいで、現在児童数が350人です。そういう児童、つまり車に乗れない子どもやお年寄り、または障害をもっている人が、ほとんどの時間を過ごす地域なんですね。別な言い方をすると歩いて暮らさなければならないところ。そういう方々というのは、一般的には社会的なマイノリティ、少数派にとっての生活エリアだと。だからこそ、小学校区というのはそういう方々にとって住みやすいエリアでなければならないんじゃないか。逆に言えば、車に乗ってスタスタ何百キロも行けるような、特に成人男性が豊かに暮らせるというのは大切なんですけども、何よりも、車に乗れない地域社会に暮らす人たちにとって大切なエリアが小学校区ではないか。場合によっては、中学校区、一小学校、一中学校区という村なんかもありますから、そういうところは中学校区がそうなんですけれども、我々のところは小学校卒業すると中学校に行くんですけれども、3つの小学校からくるんですね、そうすると中学校区というのは非常に広いエリアなので、小学生くらいだと、広すぎる。そんな単位の地域かなと。

2番目にはほとんどの大人、中には卒業証書だけで字は書けない方も実際にはいらっしゃるんですね。でも、ほとんどの人が卒業しているという意味で、心のふる里のような存在ではないか。そういう価値を持った、眼には見えない価値を持ったエリアじゃないか。

3番目に小学校の行事や事業、行事にはいろいろあります。例えば、運動会だとか、または子どもたちの校外学習とかですね、さまざまな行事があるわけですが、それから日常的な授業、算数、国語、理科、社会、生活科、総合的な学習の時間とか、またはクラブ活動なんかもあります。文化的なクラブ、スポーツ的なクラブなどを含むそういう授業には子どもが小さいこともあり、条件さえ整えば、誰でもが参加しやすいんじゃないだろうか。誰でもです。保護者はもちろん、地域のおじいちゃんやおばあちゃんを含めてですね。そういうところが、どうも小学校または小学校区ではないかというふうに思います。

秋津では何をやってきたかということを中心に大きく3つに整理して申し上げたいんですが、どこにでもある小学校、日本全国には22,000の小学校があるんですね。そのほとんどが公立小学校です。私立が約200校くらい、国立付属が約70校くらいありますが、パーセントにするとほとんど意味をなさないくらい少ないんです。ですから、市町村立の小学校が圧倒的ですから、その小学校がよくなるとだめなんだという意味で、小学校と地域が持っている3つの機能と私は言いますが、活かして生涯学習の推進を秋津ではしています。

その3つの機能の第1番目が、授業や行事を住民と協働するという事なんですね。年間で延べ地域の人が20,000人参加しています。人口が7,500人くらいですから、一人当たり約3回弱参加している学校です。秋津小学校では、そういう地域の方と一緒に授業する領域を『人間大好き

ふれあい活動』というふうに呼んでいます。毎年50～100時間くらいを学年に応じて配当して、学校の授業として取り組んでいます。こういう事業方法が去年から始まったんですが、文部科学省が推進している『学校支援地域本部事業』というのがありますけれど、ほとんどそういうようなことである。写真の右側はまだ新しいまちでありながら、「秋津馬鹿面踊り」というのがあります。これを毎年3年生に、地域の人が教えて、地域最大の祭りが秋にあるんですが、こちらが小学校でこちらが住宅地、真ん中の道路を歩行者天国にして、子どもたちが「ソーラン節」を踊ったり、休日なんですけど授業日になっています。代替え休暇は別に設けますが、そこでこの馬鹿面を発表する。ですから子どもさんがいらっしやらない人たちも、「あ、〇〇くんが踊っている」とか、地域ぐるみ子どもをみていくような体制がだんだんできてきています。

どんな日常的な授業の参加があるかというと、例えば、1年生には“生活科”という教科があるので、そこでは地域の方々が昔遊びを教えている。2年生だと“なかよし給食”、最近は食育がすすめられていますが、子どもと一緒に給食を食べる。これも授業なんです。4年生国語には“落語”というのがあるんですね。国語の中に落語という単元があるので、地域の方、この方はスポーツリーダーサッカーのスポーツリーダーで、現在は秋津地域の総合型スポーツクラブのリーダーなんです。これみると、“じゅげむ”。“これどうだった？”って先生と子どもに聞いたら、「大変評判が悪かった」って言っていました。何で悪いかというと、“じゅげむ”ってものすごく長いんで

すね。だいたい子どもが集中できるのは20分。それなのにシママラさんといいます。が、一生懸命覚えたものだから全部披露したくて授業時数全部“じゅげむ”やっちゃったっていうんですね。こういうことだと長続きしないので先生と相談して最近は短い落語をやるようになっているようです。6年生ですと“総合学習”で、こっちが子どもこっちが地域の方々と、茶道を教える。子どもに聞くと「何がいい？」ってきいたら、「和菓子をもらえる」ということがどうもいいらしいです。そういう話はおばちゃんには言わないんですね。内緒にしておく。

こんなふうにとにかく先生がこういう授業を充実したい。一人ではできない。また知識をもっていない。または、技術をもっていない。ということを経験した人として先生が授業に取り入れるわけですね。われわれ地域が先生に「やってくれ」というんじゃないやなくて。先生自身が課題としている教育技術をもっともっと膨らませていきたい。充実させていきたい。それをつなぐのが我々PTAだったんです。最初はですね。現在は我々のようなコーディネーターがたくさん生まれていますので、先生側からも発信するし、地域の我々からも発信していく。

2番目の機能として、学校というところには、学校施設があります。だいたい日本全国どこでも体育館と校庭は地域開放されているんですが、校舎内施設というのはまだまだ開放されていないんですね。私たちは、先ほどの授業の協働によって先生たちがこういうふうを考えるようになったんです。「学校の授業が充実するがゆえに、学校開放というあり方があるんだ。つまり、授

業を開放するというあり方があるんだ。だったら、施設も開放していいんじゃない」という先生が増えてきた。そこで子どもの数が減ってきたことによって余裕教室が生まれてきたものですから、1回の余裕教室4つ、それから子どもの数が減るということは、学級花壇も余裕が出来てくるんですね。ですから、現在300㎡の学級花壇それと学校の備品である陶芸窯この3つを秋津小学校コミュニティルームという名称で、現在から14年前1995年に開設してもらって、私たち秋津コミュニティの51人役員がいますが、その中にコミュニティルーム運営委員会というのを教育委員会と一緒に話し合いながら、作って、そのうち15人が鍵をもって年間365日生涯学習施設として地域住民の管理によって運営しています。ですから、これも同じく文部科学省が推進してきた『放課後子ども教室』という事業があるんですが、これも秋津コミュニティが自主運営して行っています。例えば、民謡サークル“どんつく”という方々のサークルが秋津コミュニティにあるんですけども、その“どんつく”の方々が大人だけの練習をするのではなく、月に2回ほど子どもたちに民謡を教える。これも放課後やっています。放課後ですから先生が出る必要はありません。場所だけ借りて、地域が運営して、大人と子どもが触れ合っているということです。休日でないとい、どうしても男性、お父さんたちは学校に参加できないので、お父さんたちの発案で、休日にうどん作り教室などもやっています。どうもこれは子どもの居場所だけではなく、実は男性の居場所にもなっているんだというふうに感じています。こういう費

用はほとんど無料です。または若干経費がかかる場合は、子ども一人あたり100円という自己負担をしていただく場合もあります。

今申し上げた、学びということと施設というものを開放していくと、最近秋津モデルと言われているんですが、私は「スクールコミュニティ」とよんでいるんですね。どういう状態かというと案外知られていないんですが、2002年から完全学校週5日制になりました。これを模式化した図ですが、横軸が年間365日です。縦軸が1日24時間です。そうすると子どもが学校に行くのはだいたい8時から4時まで。8時間とします。年間どれくらいの日数行っているかという、実は200日間しか行っていないんですね。残りの165日は学校というのは休校日なんです。ただし教員は200日プラス23日の出勤がありますので、教員全体は8時間労働×223日で約1800時間。ちょっと細かいんですが、細かいのは私ビジネスマンなものですから、ビジネスというのはマーケティングという市場調査というのをよくやるんです。そういう手法というのが実は地域活動にも重要なんだということで、ちょっと図を使わせてもらいます。そうするとですね朝から晩まで遅刻しない年間200日間学校にまるまる行っても実は一年のうちたったの18%しか子どもは学校に行っていないんです。ということは残りの82%は家庭や地域にいるということになるんです。2002年度からです。だから「家庭が大切、地域が大切」って言われるようになってきた背景にはこういう時間的な単純な比率の違いがあります。施設の問題にかかわると、

学校の授業の終わった後放課後、これは授業に使わないので地域に開放すれば、生涯学習推進ができる。この休日の165日まるまる地域に開放すれば、生涯学習が推進できる。つまり、最近税金が減ってきていますから、新しい建物を建てようと思っても予算がつかえません。でもどこにでもある小学校施設を、地域運営型で解放すれば、自らがパソコンを学びたいとかパソコン室ありますから、自らが音楽の練習をしたい音楽室あります。自らがものづくりしたい工作室があります。そんなふうにお金をかけないでできるんですね。それを実践したのが秋津です。この休日もさっき申しあげたように利用者住民が鍵を持ってますので、その人のところに借りに行って使い終わったら掃除をしてその人に鍵を返す。だから行政の管理人というのはいっさいいけませんので、行政も人件費がかからない。そういうあり方なんです。

特にお父さんたちの出番というのは、特に休日ですね。特に、私が推進してきたのは、飼育小屋作りであるとか、一教室を改造した低学年用の図書室。「ゴロゴロ図書室」という名を付けましたが、このような施設開放をお父さんたちが主に休日にやっています。始めてみて気づいたんですけども、一般的にお父さん世代の人たちに「学校に来て下さい」って言っても来ません。何で来ないかっていうのは、お父さんって結構気位が高くて、学校に行ったときに自分がどういう居住まいでいるのかっていうイメージがつかめないんですね。または、学校や地域のこと子どものことは、女房の仕事と決めつけているお父さんも結構いたりします。けども、例えば一級建築士の

お父さんもいれば、秋津にはいませんけれども、例えば大工さんっていう職業の方もいらっしゃるかもしれない。つまり、ものづくりに関係する人がいるかもしれない。そういう方には、「飼育小屋を造ります。だからお手伝いしてください。」ってはっきり言うと結構わかりやすいので、出て来やすいんですね。だから、具体的な作業内容をきちんとお知らせすると出やすいということがあります。そういうお父さんたちが出てくるようになってから考えたんですが、何で今生涯学習っていうことが言われるようになってきたか、つまり生涯ですから、昨日生まれた赤ちゃんから、明日お亡くなりになるかもしれない高齢の方々までがいつでもどこでも学べる社会が生涯学習社会というわけですね。

そこで、調べてみたのがこの図なのです。平均的な日本人夫婦のライフサイクルの変遷。この上の図は、大正期、大正の9年1920年の夫と妻の結婚してからの一生です。夫が25で結婚し、妻が21.2歳で結婚する。第一子が、長子が誕生するのが、夫が27、妻が24くらい。末子の誕生が、末子が何と5人なんですね、これ平均なんです、夫40くらい妻が36くらい。長子が結婚するのが52歳、夫だけにいうと、夫が定年するのが、55歳なんですね。このときに初孫が誕生します。その時妻は50.1歳。この時代ですから、大正の1920年くらいですから、夫の定年って言っても第一次産業に従事している方は定年がない。だけでも農協だとか国鉄だとか今で言う一部上場企業なんかもありましたから、役場の定年も55でした。今皆さんが55、この時代の55になったと想定してくださ

い。特に男性。「さあ、55まで元気でやってこれた。これも、女房のおかげだろう、だからこれから福岡に温泉旅行でも行って女房を慰労してあげよう」なんて計画立てているうちに、あっという間に6年経って旦那が死んじゃうんです。ここ笑っていただきたいところなんです。だから今日みなさんのお顔をみて先にこれやっちゃおうと思ったんですね。夫が死ぬとだいたい奥さん喜ぶますよね？だからここピンクにしてあるんです。結婚直後も新婚だからピンクなんです。だんだん色が濃くなって行って、夫が死ぬとピンクになって喜ぶ。喜ばない人もいますけど、「ああよかった、旦那が死んで長生きできるわ」と思ったら、実はこの時代、たったの4ヵ月後に奥さんも後追いしているんです。だから昔と思うかもしれないけれども、実は、89年前の話なんですね。これが平均的な日本人のライフスタイルだったんです。結婚ができたんですよ、結婚ができたなら。何言いたいかっていうと、この後の人生ないんですから、市長さんが困るような「要介護認定」ってこの時代ないんですよ。要介護がないと同時に「生涯学習」という概念もないんです。つまり、働いて、働いて、コロッと死んでくれたんですから。だから世の中負担がなかったってことです。ところがその後どうなったかという、2003年、夫の結婚が遅れ、妻の結婚が遅れ、第一子が誕生するのが31くらい、末子、実は末子っていうのは2人いないんですけど、1.37くらいですから。一応平均2人だとします。夫の定年がたったの5年しか延びていないんです。それで、ここで逆転現象があつて、長子の結婚は、夫の定年後初孫誕生も定年

後、ここで死んでくれればよかったんです。ところが、夫の寿命が18年延びて、平均的に80くらいです。妻がさらに86くらいまで。こういう時代ですから、第2の人生、第3の人生が、こんなにあるんです。これを自治的に主体的に元気で生きてもらって、気がついたらコロッと死んでくれたと、ここも笑っていただきたいんですが、そうしないと財政がもうもたないんですよ。わかりますよね？だから長野県なんかで「ピンピンころり」なんて言葉ができるわけです。それをするのは誰か？やっぱり自分たちなんですよ。ところが、これだけ長生きできるようになってきたんです。実は、WHO というところで、毎年発表していますが、連続14年間世界1の長寿国なんです。長寿国って聞くといいですよ、だけど、高齢者国って聞くと何か暗くなっちゃう。問題は高齢者が元気な世の中であってほしいということなんです。だから、生涯に渡って学び続ける社会にしていきたい。スポーツでもいいし将棋でもいいし、漬物つけでもいいし、その漬物の技術だって子どもたちにとっては、立派な学習素材になるんですから、生活科や総合的な学習の時間で、先生が取り入れてくれさえすれば、地域のおばあちゃんたちが、学んできた成果、それを生かすことができる社会、これが生涯学習社会だと私たちは思って推進してきたんです。

だいたいわかっていただけたかと思えます。だから今言ったようなことは、時代の変化が生涯学習コミュニティづくりを要請しているんだ、特に大人の方々に要請しているんだということですね。肝心なのは子どもたちにとってどうかということが同時

に地域ぐるみで子育てが必要な時代なんだ。つまり、少子化と核家族化がどれくらい進展してきたかというのがこちら側の図なんですね。この時代は、大正の時代は1世帯平均6~7人くらいの家族があっただろうところが、現在は、去年の3月の発表で2.43人に家族が減っちゃったんです。上限として3人だとします。3人の一人が小学生だとします。残りの二人はお父さんとお母さんだとします。そうすると、子どもが家で会話できる大人は何人いますか？たったの2人になります。そのうちお父さんが、もしサラリーマンで、しかも猛烈サラリーマンだったとすると子どもが起きた時間にはお父さんはもういません。お父さんが帰ってくる時間には子どもはもう寝てるとします。そうすると家で子どもと会話できるのは、お母さんだけになります。しかも、5階建て、10階建て、最近では20階建てのような、コンクリートジャングルのマンションに住んでいたら、お母さんだってノイローゼになるかもしれません。たった1人の子どもを夫が喜ぶように学歴が高くって、みんなから素敵な子どもねって言われるようにしたいと思って必至になって1人の子どもにお母さんだけがかわかっていこうと思ったら、場合によってはお母さんはノイローゼになるかもしれません。そういう家族形態が現代社会なんですね。子どもは一生懸命お母さんの期待に応えようとしています。小学校にあがります。小学校は学級担任制ですから、朝から、晩までその担任の先生1人としか大人とは会話しないかもしれません。その先生と気が合わなかったらどうでしょう？または、その先生が褒めてくれる先生じゃなかったらどうでしょ

う？たったの2人としか1日のうちに大人と会話しない環境かもしれないんです。これは平均ですから、そこで筑後市をちょっと調べてきました。筑後市は何人くらいだと思います？1世帯平均。こういうのは市長さんに聞いた方がいいのかな？データが平成6年から出ていたんですね。14年前。平成6年の人口が45,102人、世帯数が13,032世帯で一世帯平均3.46人が筑後市。これが平成21年の1月現在人口が48,612人、世帯数が16,713世帯、そろばんのできる方はパッと計算、2.91人なんです。どう思われます？地方だし、こんなのは都会の話だろうって思われる方多いと思うんですけど、実は日本全国同じなんです。このことを基本的に全ての大人が僕は認識する必要があるんじゃないかというふうに感じています。大人にとってももちろんなんですけど、いきいきとして生きられる社会なのか、金だけが重要ではなくて、心のつながりあいや家族だけではなくて、隣近所と持てるのか持てないのか、口だけで時代を担う子どもたちとっていいのかどうか、本当に子どもたちが誰かに褒められて自尊心を高めたり、どんな人とも折り合いをつけたコミュニケーション能力をもてるのかどうか、こういう現実にはまず数字のうえであるということにお互いが共有する必要があるんじゃないかというふうに思います。とは言っても、こちらはそうではないと思いますが、地縁もほとんど難しい、血縁もほとんど難しい、そういう中で私たちが発見してきたのは、子どもの縁とかいた、「子縁」なんです。子どもの数が少ないがゆえに、お子さんがいない若夫婦にも、子どもの価値を

知ってもらいたい。孫と同居してないがゆえに、地域の孫と触れ合える高齢者を増やしたい。そうしないと、子どもと関係ない大人がどんどん増えちゃったんです。だから運動会の1週間くらい前に運動会の練習を始めると電話がかかってくる「うるせえ」そういう大人が増えちゃったんです。子どもの声が未来なんだってどうして言える大人に我々がならなかったのか？自分の子どもであろうが、他人の子どもであろうが、やはり財産なんだ。そう思える大人を我々は作らなければならない。そう考えて活動してきた中で、私たちは「子縁」という考え方に行きついたんですね。だから特に子どもを、僕は冒頭で幸いにも3人持つことができた。幸いなんです。持ちたくてももてない、持つことができない何らかの事情で若夫婦もいるんですから、地域コミュニティにはいるんです。そういう方にとってはPTAというのは圧力団体なんです。「何よ子どもがいるから偉そうに」って、そういう団体なんです。しかも、嫌だ嫌だと言ってやってる団体なんで怪しい団体なんです。だから僕らは子どもがいる人はもちろんなんですけど、何らかの事情で子どもを持たない若夫婦や、子や孫もいない、または同居していないお年寄りなどにも、適用して地域社会でさまざまな人をつなぐ縁として子どもの縁を生かしてきたんです。そういう場所として、どうも小学校が一番いいんじゃないか、だから校庭にわざわざ「ビオトープ」と言って池や田んぼもつくったんですが、休日になると、こんなふうに誰にも言われなくて、子どもたちがやってきて第2の公園のように学校に集まってくる。この横には、ベンチもつくっ

ているんですけど、そこでバーベキューをしたり、お父さんたちは青年会費を集めて「アレの会」と言っているんですが、学校の敷地の中なので、ちょっと遠慮がちに「アレ」と呼んでるんですね。ご理解ください。そういうのをしょっちゅうやっています。

休日にどんなことをやれるのか、実は学校というのは災害時の避難所なんですね。避難所に指定しているのは市長なのです。教育長でもないし、学校長でもないんです。ということになると、365日夜中に、阪神淡路大震災は実は97年の1月17日の早朝5時過ぎですから、命からがら学校に避難したんです。ところが早朝なので、鍵が開いていないので、一部の阪神の方々は、学校の窓を割って入ったんです。ところが、窓を割って入ったものだから、真冬のその日の夜から凍えてしまったんです。つまり日常的に子どもがいろいろ、今いる学校が避難所なんだよねっていうことを地域の人知らない、避難所として、使えないということです。それを私たちが学んだので、毎年夏休みに入った直後に、学校に泊して、防災被災訓練を兼ねた泊キャンプというのをやっています。それも父子主体でやります。なぜ父子主体でやるかというと、例えば夕食の買い出しから夕食づくり、ナイフを使って子どもに教えるのもお父さん。キャンプファイヤーの準備もお父さん、テント張るのもお父さんと子ども、「ヤキヤキ」なんて言って魚やいてるんですが、こういう準備もお父さん。何でお父さんかっていうと、さっき申し上げたように1世帯平均の子どもの数が少なくなっているから基本的にお母さんが何でもやっちゃうんですね。つまりお父さんをお客さんにしちゃ

うんです。それではお父さんがお父さんとしての主体性につかないということで、できるだけお父さんで、父子主体でキャンプをやるようにしています。学校は避難所だから、泊まった方がいいんです。雨が降ったら、場合によってはおなかが痛くなったらすぐに家に帰れますし、校医さんというのがいますから、事前に連絡をして、何かあったらよろしくお願いします。どっかに連れて行ってキャンプするのもいいんですけど、けっこう大変ですから、でも学校だったら、気軽にできる。こんなことを学校でやっています。

避難所なんだから、「阪神淡路大震災で何が大変だったか？」って聞いたら、やっぱり水が大変だったっていうんですね。飲み水はすぐくるんですけど、やっぱり一週間も泊っていると洗濯物洗いたいとか、できればお風呂に入りたい、じゃあ学校に井戸ほろうってことで、幸い千葉県には「上総」という地域があって「上総掘り」という井戸堀の伝統工法があるんですね。今は博物館に道具は入っていますが、それをみんな勉強して、みんなっていうのはお父さんたちが勉強して、夏休みに上総掘道具を自分たちでつくって、そして、子どもと一緒に井戸を掘ったんです。48メートル。このときのキャッチフレーズは「1人2センチ200人、みんなで掘れば40メートル。」2センチっていったら、何か掘れそうでしょうか？どうやって掘るかわからなくても。延べ1,000人集まって48メートルで水が出ました。「ポレポレとんぼ井戸」という名前で、現在でも使われています。ただし、埋立地のためか、あいにく塩分が2%入っているんですね。海水はだいたい

5%～6%くらいだそうです、塩分が2%入っている。実は塩分がなければ、さっきの「ビオトープ」っていう池にいずれホタル飼いたい、そんなふうにも思ったんですが、防災井戸としては使える。そうすると、夏に子どもたちドラム缶に水入れてですね、ドラム缶風呂なんかで遊ぶんですね。学校がさながら遊園地みたいな感じ。ちょっと見にくいというか、あまり見せちゃいけないと思ってこいつがですね、ふるちんなんですよ。東京からたった40分のところです。一種のドーナツエリアの新興住宅地。ちゃんとね、わかるんですね。パンツ脱いで、パンツ汚れるとお母さんに怒られるとかいいながら、脱いだら汚れない。賢い！

もう1つは、校庭や体育館はどこでも解放されているんですけど、やっぱり、もっともっとまち育てに使えるようにしようということで、総合型地域スポーツクラブっていうのを2001年につくりました。これは中学校区まで拡大させてつくりました。なぜ、中学校区に拡大させたかという、習志野市はスポーツ指導員という資格制度を昔から進めているんですね。ですから人口が中学校区だったら多いし、学校数が4つありますから体育館が4つ使える、校庭が4つ使える。ということで、中学校区まで拡大させて。この趣旨というのは、学校にみんなが集って、勝ち負けにこだわらない。そして、老若男女、みんなが健康なまちづくりをしよう。だから既存スポーツもやるんですが、特に重要視しているのは、お年寄りの健康体操とか、それから普段なかなか出て来にくい主婦の方々も含めた女子サッカーとかですね、ニューススポーツと

いうのを主に取り入れて、勝ち負けにこだわらない。どうしても既存の種目別スポーツは、勝ち負けにこだわっちゃうんです。勝ち負けにこだわると、実は、うちの子もがそうだったんですが、上の子と下の子は小学校のときからミニバスケットをやって、中学校でバスケット、高校でもバスケット。ところが真ん中の子は、さっき言った長男ですね、孫が「裕くん」と言ってくれる、あの子はどんくさくてですね、どんくさいっていうと怒られるな…要するに、レギュラーになれないんですよ。中学校にあがって機会があったからバスケットの試合見に行ったら、やっぱり正選手じゃなくて、ベンチウォーマー、ベンチで応援してるんです。家に帰ってきて「おまえ試合でたいか？」ってきいたら、「でたいよ」って。「だけど、〇〇ちゃん、〇〇ちゃんたち上手だし」って。そりゃ上手ですよ。小学校のときから同じに上がってくんですから。だから何とかベンチで応援している中高生なんかでも地域で輝く場面をつくりたい。前から思ってたんです。そしたら『地域総合型地域スポーツ』っていうのを文部科学省がすすめてるっていうんで、スポーツリーダーと話をしたのが、これなんです。そうすると、卓球もやってるんですが、卓球見に行ったらですね、中学校の卓球部の子たちがやってきて卓球やってるんですけど、「岸さん、見てごらん。あの子卓球ではリーダー(選手)になれない子なんだよ。」だけど、小学生とやってるものだから、小学生にとってはお兄ちゃんなんです。卓球技術も上なんです。だから、小学生がお兄ちゃんお兄ちゃんって言って慕ってくれる。お兄ちゃん、お兄ちゃんって言われた中学

生も年下の子どもをかわいいと思う。これが異年齢交流のいいところなんです。これはなかなか学校ではできにくいんです。だから学校の施設は借りるけれど、地域のみんながそういう場面をつくることは可能なんだ。そういうことなんです。大切なのは、スポーツ文化と室内系文化というのをとかく分けているんです。スポーツも文化、室内系の公民館でなさるような、音楽だとか、そのほか将棋でもいいんですけど、そういったものも文化。だから一緒にやろうという考え方が大切です。これはリーダーの問題です。スポーツも室内系も考え方は一緒にやっとう、なぜいいかというと、子どもにとっては経験がないだけに、サッカーが好きなのか将棋が好きなのかまだわかりません。大人の都合でサッカー部に入れて言って入れてみたり、スポーツウエアとスパイクも買ったんだから、途中でやめたいって言ってもやめるなって。これは大人の都合ですよ。だから、我々の考えは、今日はサッカーやってみよう、明日はおじいちゃんと将棋やってみよう、明後日はおばちゃんとテニスやってみよう、明後日は陶芸やってみよう、いいじゃないか、いろんなものを子どもが経験して、そして「あ、僕はサッカーが好きそうだ」「将棋が好きそうだ」って。子ども自身が主体的に決めるということが大切なんです。大人の都合で決めることではないということ。まして、子どもの数がどんどん減ってくると、大人の都合で子どもを取り合いますから。大人の都合で子どもを取り合うのではなくて、大人ができるのは、さまざまな場を提供するという。そして、提供されたことを、子どもたちが経験をして、子

どもが決定するという。そうでないと、主体的な子どもにはならないんじゃないかというふうに思います。

そこで、だんだん、十数年やってくると、どういう結果がでてくるのかというのがわかってきます。私は大学でも少し教えたり、研究者との交流があるので、「見える学力」と「見えない学力」と言っていますが、「見える学力」は学力テストです。簡単に言えば。今、日本全国、3年前から始まった全国統一学力テストという点数で、某何とか府の知事などは、「何で2年連続45番なんだ！教師は何やってんだ！教育委員会何やってんだ！」って学力ばかりですよ。だけど、今は“3”かもしれない、だけど、僕は前向きに生きていきたい、そしてそうだと本当に勉強しなきゃだめだ。そう思ったとき、そのときが、例え30だって40だってそのときに学べるような、前向きに生きる力、これが僕は「見えない学力」だと思いますが、こっちの話が全然ないんですよ。そこでこれに焦点をあてて、秋津では大学の先生と一緒に調査しました。つまり、「学者融合」といっていますが、授業に年間延べ20,000人参加する、さっきのコミュニティルームという施設に年間延べ10,000人が集う。合計30,000人の大人と触れ合う大人たちには、何らかの効果があつたんじゃないか。第7中学校というところに、秋津小と隣の小学校と次の小学校の3つが通うんで、中学生にきいたら比較できるだろうということで、聞いたのがこれです。小学生のときに放課後や休日に小学校へ行った1年間の平均回数、秋津小学校の子どもはダントツに多いんです。隣の学校は2分の1、さらにこっちの

学校は4分の1なんですね。つまり、小学校が自分の居場所になってたかどうかでことです。

今中学生だけど、「放課後や休日に卒業した小学校へ1年平均何回くらい行きますか」って聞いたら、同じ比率なんです。中学生になっても自分の母校の小学校へ行っている比率が秋津に比べて2分の1、5分の1なんです。つまり開かれた学校というのは中学生になっても継続できるんですね。意識が。

じゃあ、さらに高校になったらどうかということで、今度秋津小を卒業して、秋津にすんでいる高校生男子にききました。「今の自分が好きですか？」つまり自尊心に関する「そのとおりだ、好きだ」「どちらかと言えば好きだ」この両方で秋津の高校生は、特に男子高校生ですが、50%あるんです。他地域、実は他地域、言いにくかったのですが他地域というのは実は横浜市、川崎市と福岡県の小都市の高校生の男子です。この3つとも進学校です。学力は高い。その地域の高校生たちは、「そのとおり」「どちらかと言えばそう」この両方足しても秋津に及ばないんですね。

今度はコミュニケーション能力に関することです。「友達が話してるところに気軽に参加できますか？」秋津は「そのとおりだ」「どちらかと言えばそうだ」が高いんですね。下に比べて。

じゃあ「学校行事に積極的に参加していますか？」つまり、現在通う高校への適応能力です。秋津はやっぱ高いんです。かなり高いんです。

じゃあどういう家庭環境で育っているんだろう。お母さんは私のこと、つまり「子

どものことを褒めてくれる」と子どもが言ってるんです。秋津の方は、倍ぐらいですね。「よく褒めてくれる」「どちらかと言えばそうだ」「そうではない」はゼロなんですね。

じゃあお父さんはどうか。「お父さんは私のことをよく褒めてくれる。」やはり秋津が倍くらいあるんです。これみて、私は思うんですが、お父さんも自分の居場所を学校に設けているので自分なりの活躍場面がある。だから、当然家に帰れば子どもとの会話が増える。お父さんと子どもが仲良くしていれば、お母さんも喜ぶ。だからお母さんもよくなる。そういう、良いこと循環の結果なんじゃないかというふうに感じます。

というように、つまり、さまざまな問題を、中学校だ高校だへと、先送りしない。かつて言われていた「三つ子の魂百までも」ということが、どうもやっぱり地域ぐるみで、小学校時代に、幼少期に行うことが、大切なんじゃないか。可能にするんじゃないかって私は感じるようになりました。まだ仮説というのは、調査データが少ないものですから、今後も、もっともっとやっついこうと思っているので、でもそういう傾向があるということです。

そこで、じゃあどんなメリットが学校にも出てきたかということ、授業内容が充実する。それから、不登校児がゼロになった。実際いないんですね。それから、「見える学力」、点数なんです、学校の資料では、「知的理解力の高い子ども」が多いというふうに書いてあります。私立や国立中学への高い進学率、2005年のデータですが、全56人の卒業生のうち8人が私立や国立付属中学に行った。それから、何よりも先生

にとってうれしいのは、秋津小学校区が、安全で安心な校区になってきたということ。先生のメリットとして、放課後や休日に出勤する必要はないし、夜間の電話がない。これは、転校してきた先生がおっしゃっていたことです。

それをデータで表すとこういうことなんです。習志野市には16の小学校区がありますが、その中で秋津地域は犯罪が下から2番目に低い地域です。この色を付けたところが中学校区ですね。何と我々にとって1番うれしいのはここなんです。一般的にニュータウンというのは、1回子どもが外に出ると、戻ってこないんです。だから高齢化しちゃって、幼稚園、保育所、小学校が統廃合でなくなっちゃう。だから住んでいる人が多いと、それから5階建てのような集合住宅の建物も老いてくるので、2つの古い問題っていうんですね。昭和30年頃にわぁっと建てたマンション系の団地が、今日全国で約百万戸くらい、大変な時代に入っているんです。都市問題なんです。そういう秋津でありながら、開校4年目に児童数が最大で1,148人いました。ところが、他のまちと同じで、坂道を転げ落ちるように、どんどん子ども数減って、最底が2003年度で、319人まで減ったんです。ところが何と、この翌年から児童数が増え始めて、この後2年今年まであるんですが、連続6年間約350人平均で続いているんです。さらに、5年後のデータまで調べてみたら、だいたい今と同じ50数人の入学が見込めるので、私は「サスティナブルタウン」と呼んでるんですね。持続可能、まちが持続するには子どもがいなきゃいけない。だから私の孫

が、子どもたちが秋津に戻りたいと帰ってきたことが、本当にうれしいんです。本当にうれしいんです。そういう魅力をどうやってつくるか、それは1人の先生だけではできないんだ。

行政にとってのメリットというのがあるんですが、秋津小学校コミュニティルームは年間10,000人も使っているにも関わらず、行政支出は年間たったの30,000円です。水道光熱費は学校のメーターなので、行政に持ってもらっています。特に今日、市長さんがいらっしゃるので、このあたりは強く主張しておこうと。あと、住民自治による生涯学習が推進できている。学校の避難所機能を住民自治で向上させている。放課後子ども教室を秋津コミュニティが自主運営している。そのほかいろいろあるんですが。

こういう考え方を僕らは「融合」と呼んでいます。これは実は非常に大事なんですが、今まではどちらかと言うと「連携」なんです。これは真ん中がくっついていません。ですから、学校が困っているのを助けて下さい。学校を助けるのはいいんだけど、必ずしも地域の人にメリットがないので、または、保護者にメリットがないので、自分の子どもが行ってる間はいいいけれども、子どもが卒業したら、学校へ行かなくなっちゃうんです。僕はビジネスマンなので、こういう関係性を「物的、人的な資産の交換の状態」と言っています。交換の状態ですから交換バランスが一方に偏ると、長続きしなくなっちゃうんですね。世の中の現象をこういう関係性でみてみるとよくわかります。3年前くらいに、北海道の銘菓の「白い恋人」というお菓子が、賞

味期限切れを売って、ペケになりましたよね。つまり、「自分だけよけりゃいいんだ。お客なんて知ったことじゃねーや。」っていう関係性だと、日本のような自由主義陣営だとどっかではれちゃうんです。従業員が告発したそうですが、同じ年にお伊勢参りの「赤福」っていうお餅が駄目になりましたよね。あれも、賞味期限切れを売ってた。僕ら秋津コミュニティのおじさんと当時笑いものにしたんですが、「赤がだめで、白がだめなんだから、運動会できないね」なんて。冗談言ってたんですけど。どういうふうに僕らやってきたかという「融合」と言います。学校が困っていることで、地域の方がやりたいことを一緒にやりましょう。だから、自分の子どもが世話になってるから手伝おうと思ったことはこっちと一緒にですが、自分がサッカーをやってみたり、または、パソコンができるお父さんがパソコンクラブに子どもと一緒にやってみたら、自分の子どもが卒業しても卒業しなくなっちゃうんです。だからこれを「物的人的な資産の共有や共同の状態」と言っています。つまり、初めから相互にメリットを仕組むので、長続きするんですね。こういう考え方が大切です。これを「融合の発想」というふうに私は名付けています。

最終的に我々がやりたいことは、スクールコミュニティづくりなんですけど、目標は2つあります。誰でもがいつでもどこでも学べる生涯学習のまち育てに寄与する学校をつくること。もうひとつが誰でもが安全で安心して学び働き暮らせるノーマライゼーションのまち育てに寄与する学校をつくること。究極の目的は、まちのソーシャルキャピタルを上げていくということなんです

ね。ちょっと専門的で申し訳ありません。ソーシャルキャピタルというのは、自主的な学びだったり、安全で安心な地域だったり、働きやすい学校だったり、健康だったり、住民自治だったり、相対としてのまちの魅力を高めることなんです。そのことによって、若者家族がUターンしたがつたり、Iターンしたがつたり、まちをつくること。その核に私は小学校になるんだというふうに考えています。

そろそろ、終えたいんですが、実は我々がやってきたことを、国が後押ししてるんですね。法律を変えて。生涯学習コミュニティの育成が、実は国の最大の教育目標なんだということです。2年前に改正された教育基本法には、第3条に生涯学習の理念というのがあります。ここには、こうあります。「あらゆる機会に、あらゆる場所において、学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が、図られなければならない」図られていないから図られなければならないなんです。このあらゆる機会というのに、小学校の授業を当てはめています。あらゆる場所というところに小学校の全ての施設を当てはめます。これができるんです。第3条がどれぐらい上位かと言うと、第1条が教育の目的、第2条が教育の目標、ついで第3条ですから、その後に教育の機会均等、第5条に義務教育、第6条に学校教育、第17条に社会教育などがあるんですから、国の意思は生涯学習社会の実現なんですね。学校教育や義務教育は、その後なんです。これが上だ下だではなくて、それくらい日本の時代が変わってきたということをまず知っていただきたいということです。

実は学校教育法も変わったんです。それに伴って。生涯にわたり学習する基盤が養われるようになって、小学校の条文に入っているんです。だから、小学校の先生方も、地域の方々も一緒になりながら、現在の子どもも生涯学習の主体者であるというふうに考えなければいけないんです。

さて、なんで、学校や家庭地域が一緒になってやんなきゃいけないかという典型的な例の1つですが、これは文科省が行った全国学力テストの去年のデータの中の一部です。これは中学生です。朝食を毎日食べていますか？国語のAでこちらが「食べている、食べていない」国語のB「食べている、食べていない」数学でA「食べている、食べていない」数学Bで「食べている、食べていない」つまり、朝食を家で食べてこない子は学力が低い。明らかなんですね。質問2、学校に持っていくものを前日か当日の朝に確かめていますか？国語A「確かめてる、確かめてない」「確かめてる、確かめてない」同じく低いんです。つまり、家庭が悪いと言っているんじゃないんです。明らかにそういう中学生の家庭環境なり、地域環境でないと、つまりおせっかいおじさんやおばさんがいないと、明らかに学力で下がっちゃってると。だからこそわざわざ法律作っちゃったんですよね。教育基本法13条に学校家庭及び地域住民教育におけるそれぞれの役割と責任、相互の連携及び協力に努めるものとする。ちょっと前までは、家庭に国が介入しませんでした。だけど先ほど、前のデータで示すように明らかに放っておいたら、子どもはほとんど難しいんだ、だから法律まで変えて今取り組んでいるんです。

とにかく今先生って大変だということを申し上げたいんです。例えば、通学や帰宅途中の事故の責任はどこにあるでしょうか？『独立行政法人日本スポーツ振興センター法』というのがありまして、学校の管理下での傷害保険対象が規定されていますが、学校管理下には授業中など、4点の範囲があり、その中に、通学途中も入っているからです。つまり、公立義務教育小中学校は、自宅から学校に行く、学校から自宅までが保険対象として学校の責任とされているんです。だから、先生は大変なんですね。現実にマキシмум40人学級ですから、だけど、40人の子どもを担任ひとりが、安全に家から来てるかの確認安全に学校から家まで帰ったかどうかの確認ってどう考えたってできないですよ。

国の方も35,000人教員増やそうとしたんですけど、財務省が盛り込まなかった。だから『学校支援地域本部事業』なんていうのを文部省が開始したんですが、そこで、だれでもができることの1つに、例えば、秋津では学校の校庭の花壇、ご自分が楽しみとしてこれる人はやりませんか？またはクリーン運動と言ってますけども、学校の周りのゴミを子どもと一緒に拾って歩く、こういうことだったら誰でもできると思うんですよね。そういうことから学校の協力者をたくさん増やしていく、そして先生は本来の授業に集中してもらおう。このことが、今学校の応援団をつくることの大切なことじゃないかと私たちは思っています。パソコンを学びたいお父さんたち、おじさんたちは、パソコン技術を一緒になって地域の人たちと学べば、学校の広報誌なんかもつくることができます。先生の負担

が減ります。こうやって合同運動会も地域でやれば、子どもが卒業したお父さんたちも輝くことができます。環境学習教材も地域がみんなでこうやってつくったんですね。これ校庭です。畑の敷地も借りればお父さんたちおじさんたちの活動場所になります。地域の顔と名前が一致する人が学校に入っていれば、学校の安全も実は確保できるんですね。コミュニティルームをさまざまに使うことができます。卒業生のクラス会やったり、お祭りに合わせて一教室を改造してお化け屋敷やったり、いろんなことができます。先ほどの防災被災訓練を兼ねた一泊キャンプも実際に防災倉庫の備品を出して、豚汁うどんをお父さんたちが作ったり、「ナイフの使い方はこうやるんだぞ。他の使い方しちゃだめだぞ。」なんていいながらですね、ナイフ使っている。簡易トイレというのが防災倉庫にあって出したんですね。飾ってたら誰かが夜中におしっこしちゃって。

コーディネーターをつくるうえで、どうすることが大切かっていうことですが、要するに関わってほしい相手の立場や思いを慮ることが大切です。どうしても自分の思いが先に先行しがちなんですが、声かけた相手はどう思うだろうか、それが大切だってことですね。秋津でできた、いくつかキーワードがあるんですが、まずできる人ができるときに無理なく楽しく、どうしてもですね、学校と関わるとなると緊張しちゃうんです。だから、できない人ができないときに無理をして楽しくない。そういう関わりを秋津もしたことがあったので、そうでは駄目だと、本当にできる時間帯なのか、無理がないか、そのようなことを考えながらやっていくことが大切なんです。何より

も楽しくゆっくり私流でいいんだ、公共施設を借りる場合は自主、自律、自己管理が大切なんだ。自助、共助、最後に公助のまち育て。できることは自分たちでやろう。助け合ってできることは助け合おう行政頼みは最後の最後なんだという考え方です。

やっと最後にきました。ご当地筑後市に、エールを送りたいと思って、2つ大きく抜き出しました。「子どもは社会の共通の宝だ。」これは市長さんが言っているんですが、「7年前に市長就任以来、一貫して子どもは社会共通の宝という認識で子どもたちの健全育成に取り組んで参りました。うれしいことに子育て真っ最中若いママさんたちの積極的な参加を得てこの7月市民と協働による子育て支援拠点施設がお目見えすることになりました。」この文の後に続いているんですが、「また長い間過疎化に悩んできた南西部で発想の転換を図って建設されました古島校区の市営住宅も一期分20戸には学童5名未就学児27名と私たちの予想を超えて若い子育て世代の居住者が入っていただきました。この事業には従来の発想では考えつかないことではしょうが、建設敷地の確保に地元主導で積極的にご協力いただきました。自分たちのふるさと活性化を自分たちの手で図りたいという郷土愛そのものだと考えます。」もう1つは「市民と協働を一層推進する」と断言されているんですね。「私たちを取り巻く現状は決して容易なものではありませんが、大胆な発想の転換を図り、市民の皆さんとあい協力して協働のまちづくりを進めていくことが、次の時代を切り開くベースだと思います。そのためには、市職員全体がひとり一人積極的に地域と連携を深めることがいかに大切か、

現状意識からの思い切った脱却を促したい
と思います。」これ1月の議会での市長さん
のごあいさつ、ホームページに書いてあり
ました。私は素直に大変重要なことなんじ
ゃないか、私たちは学校、教育委員会、そ
れから習志野市の市長部局それらと協働し
ながら、僕らの言葉では融合と言っていま
すが、協働しながら小学校を核にして拠点
にしたまち育てを今までやってきました。
そのことをまさに筑後市では推進されよう
とされておりますので、大変うれしく感じ
ています。

残る時間を、口で言っているけれども、
具体的にどんな実践なのということで、
DVD の映像を見てもらいたいと思います。
この DVD の映像はテレビとかではなくて、
日大芸術学部映画学科のお嬢さんが1年間
秋津に通って、卒業制作で作った映画なん
ですね。約15分なんですけど、見ていただ
きたいと思います。

～DVD より～

今日の社会問題として、少子化や高齢化
社会核家族化など、さまざまな問題があり
ますが、これから生きていく人々は何が重
要となっていくのでしょうか？そこには居
場所というものが大きな意味をもってくる
と思います。

千葉県習志野市秋津小学校では、地域の
方々に小学校を共用、開放して生涯学習の
できる秋津コミュニティという任意団体が
あります。チャ・ユッチャさんです。チャ
さんは秋津の住民の方で、放課後水彩画教
室を開いています。この水彩画教室も秋津
コミュニティのひとつです。小学生の教室
選びは学校で配られるプリントや廊下に貼

ってある貼紙で選べます。クラブではない
ので、強制ではなく参加は自由です。学校
にコミュニティをつくるといった動きは全
国で行われていますが、習志野市での95
年の開始が先駆けとなって全国に広がっ
ていきました。

「文科から委託されて、その再委託で
秋津地域であそこをやってる。去年の実績
報告で、全国で26か所でやってるんでき
よ。今年は30。」

秋津コミュニティでの馬鹿面踊り愛好会
や民謡サークルどんつく通学教室など、4
0ものコミュニティがあり、みなさん自主
的に管理運営をして活動しています。

千葉県習志野市の秋津地域は1980年
に東京湾の埋め立て地に作られました。都
心まで約1時間という利便性をもったドー
ナツ圏域のベッドタウンです。ドーナツ化
現象はこのまちができて東京から大勢の人
が移り住んできた理由のひとつです。今こ
のエリアでも都市化現象が目立つようにな
ってきています。まちづくりコーディネー
ターであり、また秋津コミュニティを立ち
上げた岸裕司さんです。岸さんは都市化現
象の問題をこう考えています。「今秋津のま
ちと学校ができて、今年で26年目なわけ
ですね、開校3年目に児童数が1,148
人いましたから、一番児童数多かったです。
それからもう毎年ずっと下がりっぱなしな
んですよ。一番底だったのが2003年度
の319人それから3年連続増え始めて、
今352人に今年はなってるんですけど、
いわゆるニュータウンと呼ばれながら、実
は30～40年経ってきているまちはです
ね、特に人工的につくったまちは何らかの
都市政策を20～30年目くらいにしない

とですね、ただただ子どもが減って、子どもが減るといことは幼稚園や保育所小学校が統廃合になってなくなっちゃう。ですから、住んでいる人の老い問題と、それから集合住宅の5階建てのマンション形式なんかは建物も老いてくるわけですね。だから2つの老い問題というのが、今日本全国の大都市を取り囲むドーナツエリアっていわゆる都市問題なんです。そのことに5～6年前に気がついたもんだから、秋津では1回まちを出た子どもたち社会人になって出た子どもたちが結婚して子どもを育てるなら秋津のまちがいいとそう思ってUターンできるようなまたは、秋津のまちで子育てをしたいと思う若い家族がIターンでくるようなそういうまちと学校にしていきたい。それは5～6年前から明確に意識を持って取り組み始めたんです。何もしないとただ少子化になっちゃうんです。」

この学校には地域の人が先生となって教える授業がいくつかあります。これは馬鹿面踊り愛好会の方が教えている様子です。

中学生の数学教室に来ている小林君です。小林君は秋津小学校に通っていました。

「最初は嫌だったんです。だんだん楽しくなってきた。やっぱり楽しくて、ついつい来ちゃう。大人と触れ合うと優しさみたいなのが感じられてそれが自信になる」

ここでの楽しさの追求は居場所をつくっていく過程のように感じます。

ここでは、子どもを何らかの縁結び役として大人同士をつなぐような新しい考え方があります。それを「子縁」と呼んでおり、子縁を通して小学校に来た方がいます。

トウモトフサコさんです。「子どもを抱いたことが韓国の男の子に会うまでなかった

んです。柔らかいのも、こんなに軽いのも、抱きしめると壊れちゃうのも、何にも知らなかったんですけど、ここで知り合った、こないだ写真撮ってもらったあの男の子なんかを抱きしめる機会、何回も何回もあると、やっぱりそれも癒しですかね。自分が知らないその子たちの成長をこれから見ていけるわけですよ。最初会ったときは、ニコリともしてくれなくて、敬遠してた子が、次は手をだしてくれて、握ってくれたり、そういう細かいところ乗るときには信用して手つかまってってやってくれたりとか、来るたびに表情の違うそういうのが好きですね。なんていうか大人の遊園地みたいな。大人の癒しの場所になっていますね。怖がらずに一步踏み出してみてください。それで、人間関係っていうのはすごくしがらみもあるけれども、得るものの方がずっと多いんで、深い付き合いを子どものころから深めていった方がいいと思います。」

この学校では毎年5、6年生が、民謡サークルどんつくの皆さんと運動会でそうらん節を踊ります。どんつくの皆さんは生演奏を行っており、運動会で大きな見せ場となっています。

どんつくの代表のニシオトキコさんにお話を伺いました。

「練習はすごく大変だと思うんだけどできるだけ練習苦しくてもやって、でもって私なんかと合わせて、自分なりの最高のができたときには、うれしいだろうと思うし、どんつくとしてもうれしいので、苦労してもその先があると思うと一緒に気を合わせるというのはいいと思うのでいつもそういう気持ちでやっていますけどね。」

この学校には、子どもたちと大人の方と

でつくった手作りがたくさんあります。この稲は小学生と地域の方々とで育てたものです。

この場所はビオトープと呼ばれています。ビオトープとは植物を手入れをせずに自然に育てたものです。1999～2000年にかけて子どもの居場所のために地域のお父さんたちによってつくられました。これは井戸造りの当時の映像です。お父さんたちも汗を流して楽しんでいたそうです。ここではお父さんたちもたくさん活躍しています。

「ここにくると男でも調理とかするのよ。生きてくうえでのいろんな、調理したり掃除したりいろんなことあるんだけど、修繕したりそういうこともこの人たちに教わったの。人間的生活になってきている。それまで、仕事しか知らない。今ね、社会って、すごく、世の中ってすきんでて精神的に病んじゃってる人が多くてうちの会社もそうなんだけど、来ない人多いのよ、会社に。籍はあるんだけど。だけど、僕らなんかも、ここ来るとそういう嫌なこと全部一回リセットかかるのよ。また会社いけるのよ。自分の好きなやりたいことを見つけることが第一義で、それが一番いいっていうのを」

秋になると、運動会とならんで、秋津祭りという大きなイベントがあります。午後3時から始まりますが、地域の方々は午前中から準備を始めます。

秋津祭りは一度秋津を出た子どもや中学生にあがった子どもたちの再会の場となっています。お化け屋敷づくりの様子です。お化け屋敷はお祭りの中でとても怖いと評判です。

「たまにちょっとね、休みたいな。ちょっとね、座りたいなと思ったときにふらっところへ来られるのがこのいいところなんです。行きたいときに安心してこられるところが、この狙いなんです。だから行き場所なかったり、何か悩みがあったらおいでおいでと、いろんな人がいるからいろんな人と話もできるし、いろんな仲間もいるから」

「生涯学習の団体なので生涯学習というものは誰かに与えられてやるものではないからまたは明日で辞めればいいというものでもないし、極端に言って死ぬまで続けていいわけですよ。それと同時に一人ひとり学びなわけだから、一人ひとり個性があるので、あることについて早く技を習得できる人もいるだろうし、その人より3倍も5倍も時間がかかるかもしれない。つまり、その人なりペースでいいということなんですよ。」

この人はまず楽しむことから始めます。楽しい空間に大人と子どもがいること。そのひとときから温かい場所が生れ、地域は新しくなり続けています。みんなが主役なのです。

～DVD 終了～

どうもありがとうございました。

29年の新しいまちなので、正直申し上げて筑後市のように、おそらく1000年以上も続いたであろう地域から、むしろ我々は学んでいけないといけないと思います。おそらく今までも子どもの数は減ったり、または転変地変などもあったり、それを乗り越えて何百年千年と続けてきた皆さんの地域ですから。私たちはみなさんから

も学びながらこれから100年後200年後に秋津のまちというのを伝えていく責任があるかなというふうに感じています。今日はどうもありがとうございました。